

## 第 8 回日本成長戦略会議

シナモン AI CEO 平野未来

### はじめに

- ・ 直近 2 週間で、AI は AGI に近いレベルへと大きく前進した。最新モデルでは、簡単な指示だけで AI が自ら作業を分担・点検しながら、ゲームやアニメーションの制作など幅広い課題を一度にこなす事例が数多く報告されている。こうした最先端の能力が、すでに誰でも使える形で提供されている。
- ・ OpenAI が示す AGI までの 5 段階（①対話、②推論、③エージェント、④イノベーター、⑤組織）でいえば、長時間自律的に仕事をこなす「レベル 3」が実用段階に入り、新しいものを生み出す「レベル 4」の兆しも見え始めている。当社の検証でも、AI が約 1.5 時間にわたり自律的に作業を続け、人が費やした時間は 2 分だった。
- ・ AGI の到達時期の見通しも急速に早まっている（Google DeepMind 共同創業者は「最小限の AGI」の 2028 年までの実現確率を 50%と予測）。実行計画は、AGI 級の AI が計画期間中に現れることを前提に設計することが重要と考える。

### 1)AI 関連投資のポートフォリオ：技術の劇的な変化に対応できる柔軟性への配慮

- ・ 汎用 AI が既存の知識を応用して新しい領域の課題もこなせるようになり、企業の AI 内製化も進みつつある。特定業界向けのパーティカル AI を含め、どの領域への投資が大きな効果を生むかという前提は、短期間で変わりうる。
- ・ 特別会計の条件である「収益化・民間投資の呼び水」を確実に満たすためにも、こうした変化に対応できるよう、投資配分に柔軟性を持たせることが重要と考える。例えば、企業の AI 内製化を支える基盤（データ整備、人材育成、安全に AI を活用できる環境の整備）も、支援の選択肢に含めておくことが考えられる。
- ・ 電力需要の見通しも含め、技術の進展に合わせて投資配分を定期的に見直す仕組みを、実行計画に組み込んではどうか。

### 2)AI の実装で供給制約を解く（製造・建設分野など）

- ・ AI は 3D モデリングや CAD にも対応し始めている。当社の検証では、AI に時計を設計させて 3D モデル化し、「実際の時計と同じように動くか」と問うと、AI が自ら設計を精査して誤りを見つけ、修正した。
- ・ 人手不足が投資のボトルネックとなる製造・建設・造船などの分野では、設計業務への AI 活用が有力な選択肢になる。その際、活用の候補領域の特定、精度の検証、ルールの整備を、実装支援と一体で進めることが鍵になる。
- ・ こうした変化は AI が AGI に近づいていることの表れであり、コンテンツ分野のゲームや映像の制作など、他の用途にも短期間で広がる可能性がある。活用の広がりを注意深く観察し、必要に応じて速やかにルールを整備できる体制が求められる。

### 3)AI の「検証」能力で自律性と国際的な不可欠性を高める

- ・ AI への依存が深まるほど、AI を自国で評価・検証できる力は、特別会計の条件でもある「自律性」の要となる。
- ・ 米中は互いの主張を検証する手段を持たない一方、米国の最先端企業からも第三者による評価を求める声が出ており、信頼できる「検証の担い手」への需要は高まっている。骨太方針 2026 が掲げる「国際秩序の維持・強化」の観点からも、次のような取組は、日本の自律性と国際的な不可欠性をともに高めるのではないかと考える。
  - ① AI セーフティ・インスティテュートを強化して評価・検証の能力を国内に確保し、特定の陣営に偏らない国際的な検証拠点到る。
  - ② 広島 AI プロセスの報告枠組みを、企業の自己申告から、第三者による検証や AI の異常の通報制度を含む仕組みへと発展させる。あわせて、ASEAN などアジア諸国の参加を広げ、開かれた枠組みに育てる。
  - ③ 米中を含む各国の研究者・評価専門家が参加できる、技術者レベルの対話の場を日本が提供する。
- ・ 11 月の APEC 首脳会議など国際的な場で、こうした取組を日本から提案すれば、国際的な不可欠性をさらに高められるのではないかと考える。